

## 対談採録

### (全文)

**○司会** まず野口さんから、きょうの植樹活動の感想と、それから鳥取県の山、森、自然についての印象をお伺いしたいと思います。よろしくお願いします。

**○野口氏** そうですね、まだ山登ってなくて、こちらに来るたびに、もう登ったのってみんなに聞かれて、まだ登ってないのがプレッシャーなんですけど、そのうち必ず大山の方も登りたいと思いますけれども、そうですね、きょう、まず午前中に市内でごみ拾いから始まって、ごみがね、やっぱり清掃キャンペーンって、ある程度ごみがなきゃ困るんですけど、ごみがなかったんですね。きれいでした、とても。特に道路のところは本当に落ちてなくて、困ったなあと思ひまして、それで川のところへ行ったら、川のところは若干ありまして、ごみに助けられましたけど。

でも、本当あれですね、全国いろんな、こういった清掃キャンペーンで回っていると、その地域地域によってすごい差が出て、例えば山と結びつけていいますと、地元の山に登って、山がきれいなどこって、大体おけると、町はきれいなんですよ。山が汚いところってね、大体里を見ると町も汚かったりしてね。ですから、本当にそれは全国回ると、そういうパターンが多くて、特に海岸もそうですし、どこでもそうなんですけども、地元の人が一生懸命取り組んでいるところはきれいですね。そうじゃないところは、やっぱりその分ごみが残ってね。ですから、そういった差がすごく出るんですよ。

ごみを拾うというテーマで全国を回ると、その差がいろいろと目に見えて、ですから、おもしろいんですよ、ごみから見えてくる何か社会があつて。ですから、本当に今日は、ちょこっとしかできなかつたんですけど、ごみがきれいだなと思ひながら、いろいろお話し聞いたら、数日前に天皇陛下がいらして、多分その影響もあつて、みんなきれいになつてんのかなとか。ただ、とてもきれいで。

あと、森の方は、何ですかね、日本というのはあんまり、今日ね、皆さんにももうお話ししましたが、これだけ森があつてね、飛行機から見ると、日本列島はもう本当に森に囲まれていますけど、というか、森の中に国がありますけど、ただ、意外と健全な森が少なく、ほったらかしの森が多くて、中が薄暗くて、生き物も生きれなくてね。そういう中で、人間が手を入れた以上は、どういう森をつくっていくか、手を入れ続けるかという

ことが、これから最大のテーマかなと思いますけれども、何となくそういったようなことをね、きょう、5種類かな、いろんな木があったもんですから、森というのは何？というのを、こういうキャンペーンを通して何となく感じられればいいかなというふうに思っていますけどね。

**○司会** ありがとうございます。

野口さんは、まだ大山に登られていないということですので、ぜひ大山清掃登山を企画して、一緒に登ってみたいと思います。

**○野口氏** 多分大山はごみないでしょう。

**○司会** ありません、余り。

**○野口氏** そうでしょう。多分ないと思いますよ。と僕は思いますけどね。

**○司会** ありがとうございます。

それでは、平井知事は先日、鳥取で開かれました全国豊かな海づくり大会でホスト役を務められました。天皇皇后両陛下も来られて、大変気苦労が多かったと思います。本当に御苦労さまでした。

知事には、やはりこのすばらしい鳥取県の山、森、自然について、その魅力をまず語っていただきたいと思います。

**○平井知事** 皆様、こんにちは。

きょうは450本もの木を皆さんで植えていただきまして、本当に感謝をいたしております。

実はこの出合いの森でありますけれども、皇太子殿下がこちらに来られて育樹祭をしたときにつくられた公園なんです。森林公園であります。いよいよ今度は全国植樹祭が2年後に迫ってくるということになりました。

きょうは、こうして格好いい野口健さん、アルピニストをお迎えをして、ここの森も急に日が差してきたような感じがいたしております。さっきから気になっているんですけども、野口さんはこういうスタイルでございまして、やっぱり足が長いんでしょうね、私、一生懸命足伸ばすんだけど下に届かない。

**○野口氏** いやいや、僕も相当無理して。

**○平井知事** 森原さんも届かないみたいですから、何となく同類かなと思っているわけですが、こうして野口さんと一緒に森を、あるいは環境を語ることを、本当に幸せだなあと感じております。

実は、きょうは広島から朝出まして、こちらの鳥取市内の幾つか行事をしてこっちへ回ってきたんですけども、中国地方というのは、やっぱり山がちなんですよ。東京の方だと関東平野、だだっ広い平野というのはあると思うんですけども、やっぱりこちらの方はそうございまして、「幾山河越えさり行かば寂しさのはてなむ国ぞ今日も旅ゆく」、これは若山牧水の歌なんですよ。

実は若いころ、野口さんのころよりもうちょっと若いかもしれません、そんなころにこの中国山地を歩いて旅をして、これはすごいなあという感銘を受けながら、やっぱりこうやって山や川を乗り越えて歩いていくというのは、これが人生なんだろうなと、そういうように感じたんだと思うんです。そんな歌を思い浮かべながら、きょう、広島の方からこっちの方へとやってきたんです。

実は鳥取県、せつかく野口さんもいらっしゃっているんで、少し山の自慢といたしますか、美しさを申し上げたいと思うんですけども、百名山というすばらしい山がございまして。この百名山の中で、中国地方で大山はただ一つの百名山なんですよ。高さが1,729メートル、剣ヶ峰というのが一番高いんです。でも、僕らはこの1,729メートルだって言わないんです。1,709メートルだって言うんです。なぜかというと、弥山という山がありまして、その弥山の方の頂までが高さ1,709メートルなんです。これ、実は10年前までは1,711メートルあったんです。

何でかといいますと、今回、3月11日の地震がありましたけど、鳥取も地震がありまして、平成12年の10月6日にマグニチュード7.3の地震があったんです。その地震の前までは、その弥山は1,711メートルあったんですけども、終わってみて測量してみたら1,709メートル、2メートル縮んでいたんですよ。そんなようなこともエピソードとしてあるんですけども、そういう1,709メートルを使うんですよ。これは、実は1,729メートル、高いからいいじゃないかと皆さん思われるかもしれませんが、山が荒れるからなんです。1,729メートルの剣ヶ峰の方に行こうと思うと危険が伴いますし、それから鳥取県の県民は山をきれいにしようって守ってきたんです。

大山も登山ブームになりました。昔からいい山だったんです。信仰の対象だったんです。出雲神話の世界でも「神在す山（かみいますやま）」と言われていました。それでその後、天台宗系の宗派が入りまして山岳仏教の信仰の対象になって大山寺というお寺が開かれました。金蓮上人とか、あるいは豪円とか、そうした名立たる名僧も生まれたんですけども、僧兵が3,000人もいて、鎌倉時代の終わりには鎌倉幕府をやっつけるぐらい、後醍醐

天皇をいただいて、名和長年と一緒に大山の僧兵たちが立ち上がって、この日本をひっくり返したのが実は大山の力だったんですね。そういうような信仰の対象だったものですから、人があんまり入らなかったんです。だから、これはきれいなはずでございました。

登山が始まったのは天保年間だと言われているんですけども、江戸時代ぐらいから浜田の方が来られて大山に登ったとか、そんな記録が出てくるんですけども、大山の登山が徐々に始まってきます。また、明治の時代に入りますと、いよいよ山が開かれてくるわけですが、特に戦後、登山ブームがやってきまして、昭和40年代ぐらいから物すごい数のお客様が登山客で来られるようになりました。そうしたら、山の頂上のところが、草が全部なくなってしまいました。

踏み荒らすと言ったら失礼なんですけども、人間が入るということは、どうしても自然に対して負荷がかかるんです。なもんですから、山の頂が土くればっかりになっちゃいまして、私たちは昭和60年ごろから一木一石運動という運動を始めたんです。山に上がる時は石とか木を持って上がりましょうと。で、上の方に養生しまして、こもをかけて養生をして、少しずつ戻していったんですね。今では木道の周り一面にダイセンキャラボクという鳥取県の木が山頂あたりでは見られるようになりましたし、山頂の近くですね、弥山の山頂の方でも、ダイセンキスミレという大山の固有種の黄色いスミレの花が5月ぐらいになるときれいに咲くんです。

私なんかも登るんですけども、とってもやっぱりいい山でございまして、きょう東京に帰られるのかもしれないけども、もしよろしければ、もう1泊していただいて、そうしたらこの中から、そうですね、100人ぐらいはついていくんじゃないかと思いますが、一緒に登らせてもらいたいということで行くんじゃないかと思います。ぜひ鳥取の山も、これから愛していただけばなと思います。

**○司会** ありがとうございます。ぜひ野口さんも石を持って、大山の頂上まで登っていただきたいと思います。

先ほど司会の方からも御紹介がありましたように、野口さんはエベレストなど、世界7大陸の最高峰を登頂された、当時の最年少記録をお持ちです。これも有名なんですけれども、やはりエベレストの清掃登山、それから富士山の清掃登山で大変マスコミでも報道されました。

この清掃登山を始められたきっかけ、それから活動内容、成果はどうだったのか、そのあたりを、まずお伺いしたいと思います。

**○野口氏** そうですね、そもそも環境問題に関心があった方じゃないし、そもそも高校時代は学校でいろいろ問題があって、ぐれまして、学校で人をぶん殴りましてね、そしたら相手がけがしちゃいましてね、それで停学処分になったのが15歳のときですね。

停学になって、ぶらぶらぶらぶらしているときに偶然出会ったのが植村直己さんの本で、その植村直己さんの本を読んでいたら、直己さん自身がね、御自身が自分は落ちこぼれだ的なことを書かれておりましてね、勉強もできないし、なかなか就職もできないし、ただ、その中で山だけはこつこつ、こつこつ、こつこつ、こつこつ登られて、結果的に日本人初エベレスト登頂とか世界初とかね、結果的にそういつてなっていくのは、停学の真っ最中に読んだもんですから、何となく勉強できなくても、何か一つやればというようなところで、お先真っ暗というときに一点の光でしてね、それがきっかけでこの世界に入っていますから、当時、環境問題なんて考えたことないですね。

そもそも人をぶん殴って停学になるような男が環境問題に関心あるわけないんですよ。ですから、山は登っていましたが、あれは環境問題とかって考えてなくて、要は自分のためにずうっと登ってきた、10年間ぐらいにわたって。

ただ、エベレストに行ったときが一つの大きなきっかけになって、当然初めて行く山というのは事前に調べるわけですよ。エベレストは調べやすく、あれだけ有名な山ですから、いろんなテレビが過去に入っているし、写真集もいっぱいありますしね。ですから、その映像なり写真で情報を集めると。それを見ながら、これから僕が行くエベレストはこんな世界かあとと思いながら行くんですけど、実際行ってみたら、テレビなり写真集なりで見た世界とは全く違う世界ですよ。まず登山隊が多い、毎年何千人か入っていますから。僕は特に4月、5月に行くんですけど、40隊、50隊いる。でも世界じゅうの登山隊がうわあっと集まっていますから、世界じゅうの国旗がこう並んでましてね。ですからイメージでいうと、あのベースキャンプはオリンピックの選手村みたいなところでして、これがほかのヒマラヤの山々とは決定的に違うところですね。

大体登っておりのに約2カ月かかるわけです。ですから2カ月間、あれだけの人が生活すると、食料、燃料、衣服、全部持ち込むわけです。その一部一部がずうっと長年捨てられてきたんですよ。ですから、本当にこのベースキャンプに入ったときに、一面ごみがあつと散乱してましてね。これは、どのテレビの特集を見てもごみは映ってない。ですから、テレビの世界と実際の世界とのギャップ、だからといって、すぐごみを拾おうと思ってないんです。というのは、もうきついんで、いるだけで。高山病に必ずかかりま

すしね。もうげえげえ吐きながら、頭痛もすごいし、エベレストは必ず毎年遭難者が出ますからね。あの当時で1,000人ちょいの方が登っていましたが、300人前後の方が遭難して亡くなっていますんで、亡くなった方の遺体が至るところにそのまま放置されていますしね。かちんこちんに凍っているんで、遺体も腐らないんですけどね。ですから、そういうとこへ登って帰ってこなきゃいけないんで、もうごみどころじゃないんですよ。

ところが、一つのきっかけが、よく見たら漢字、平仮名、片仮名、つまり日本語のごみが大分まじっていて、ああ、日本隊も結構置いてきたなと思ったんですね。と思ったら、いろんな国の登山家が、健、おまえら日本人が毎年来て、さんざんごみを捨てるんだというのをヨーロッパの方が結構言い出したんですよ。国際隊にいましたから、テントの中で、おまえら日本人が日本人がって言われてね、あれ、かちんとききましたね。例えばおまえ、健独自のけしからんという個人バッシングならほっとけばいいんですけど、ああいう世界の舞台で、それはおまえら日本人だとかね。あと、彼が言ったのは、おまえら日本人はヒマラヤをマウントフジにするのかと。それはどういう意味かと聞いたら、富士山は世界で最も汚いと聞いていると言うんで、自分の国の富士山だけじゃなくて、エベレストまで富士山のごとく汚すのかとか、とにかく言われたんですよ。

あのときに何を思ったかという、環境ということじゃなくて、確かに日本のごみは多かった。ですから、もうやっちゃったことはしゃあないですからね、なら、もう一回僕ら日本人が戻って日本隊のごみをおろせばいいし、ほかの登山隊のごみもあるんで、じゃあ全部おろしちゃおうと。要は一部汚したのは日本人かもしれないけど、最終的にエベレストをぴかぴかにしたのも日本人であると。だったらおまえら文句ないだろうみたいな、そんな気持ちです。

ですから、この活動を始めてから、環境問題ってこういうことかな、こういうことかなというのは後からいろいろ感じましたけど、動機は、エベレストが汚かった。まして日本隊のごみが一部ですけどあった。そこでおまえら日本人が日本人がって言われたんで、じゃあ、ごみ拾うかというように、要は、表現は乱暴ですけど、売られたけんかはみたいな感じですよ。

だから、ごみ拾えば文句ないだろうみたいなところから始めて10何年来ましたけど、ただ、この活動も大分広がって、この春もエベレストへ行ってきましたけど、あれだけ汚かったのが、やっぱり10何年続きますと、ほかの登山隊も今はごみを極力持って帰るし、地元のシェルパが中心になって、やっぱりごみを拾っているんですよ。ですから今、大

分きれいになったし、富士山はもう大分きれいですね。ですから、やっぱり活動を、ただか10年でも、本格的に10年やっていくと、意外と変わるんだなという気がしますね。

**○司会** 富士山を世界遺産にしようという動きの中で、やはりごみが多くて、自然遺産はなかなか難しいと言われているんですけれども、どうですか、今の富士山の状況を野口さんはどう見られているんですか。

**○野口氏** そうですね、世界遺産の中で、自然遺産があって文化遺産があって、最初のころはやっぱり自然遺産を目指すという話があって、自然遺産にするには、要するに富士山にしかない生態系というのがさほどないという中で、自然遺産は厳しいということで、途中から文化遺産ということにテーマを切りかえて、今、多くの人が目指しているんですけど、一つはごみの問題ですね。

ただ、ごみの問題が大分解決してきて、それで最初のころは、富士山の世界遺産という話があったときに、はしにも棒にもひっかからないと言われていましたけど、ごみの問題が大分解決して暫定リストまで上がったんですけど、ただ、僕はずうっと活動していて、周りで富士山の世界遺産というのが最近、山梨県なり静岡県が声を上げてまして、大分地元もいろんなイベントがあつてね。ただ、何でしょうね、世界遺産というのは、じゃあ何のために世界遺産にするのかという、そこの一番大事なところが何となくスルーされている気がしましてね。

いろんな取り組みがあつてきれいになって、特に今、文化遺産を目指しているということの中に、一つは霊峰富士というのを指摘する人がいる。ただ、本当に今、富士山を霊峰と思っている人が果たしてどれだけいるかということですよ。ですから、こういう世界遺産だという言葉だけがひとり歩きしますけど、本当に僕たちはそういう思いで富士山と向き合っているかどうかということですね。まだまだごみはあるし、そうはいってもあるしね。

ですから、何か細かいいろんな取り組みをずうっとこつこつやってきて、結果、世界遺産に選ばればそれでいいんですけど、世界遺産ありきで進んでいくというのは何となくこっけいだなと思ひましてね、それは非常に感じるし、例えば屋久島なんかも世界遺産になった。世界遺産になって、それはすばらしいことなんですけども、逆に世界遺産になってしまったために大量に人が行くわけですよ。何人までにするとか入山規制とかやらないんで、それにガイドをつけなきゃいけないのかというルールもない。そうすると、世界遺産になってしまったがために、あそこの森が荒れたのも現実、事実ですよ。ですか

ら、やはり何のために世界遺産にするのかということが、これは本当、最も大事で、そこがないまま進んでいくというのは怖いなあとと思いますけどね。

**○司会** それからもう1点、登山者にとってトイレの問題がいつも大きな問題になるんですけども、ヒマラヤでは、トイレはどうされていたんですか。

**○野口氏** ヒマラヤのトイレは、できるだけおろすんですけど、全部は無理ですよ。ただ、僕らは6,600メートルぐらいまではおろす。そこから上はなかなか現実的にできないんですけど、ベースキャンプに関してはドラム、トイレテントがあって、たるを置いて、そこにトイレをして、たまったら、それを4,000メートルぐらいまでおろすんですね。4,000メートルまでおろすと土があるので、そこに埋めると。

ただ、トイレは大変ですね。特にヒマラヤは氷河なんで、ずうっと氷河に今まで埋めてきましたから、すると、水がないんで、氷河を砕いて溶かして飲むわけじゃないですか。テントの周辺を掘っていると、がつんとぶつかって、昔のうんこがいっぱい出てくるそうですよ、氷河の中から。栄養はあるかもしれませんがね。

ただ、トイレが大変です。トイレを持っておりるといのは、日本は大分広がりましたね。日本の山で、例えばバイオトイレとか、あと北海道の利尻富士なんかも、今、屋久島もそうですけど、携帯トイレというのが大分広がりましたけど、ネパールは難しく、どうしてもネパールの社会というのはヒンズー教の影響があって、カーストの社会ですよ。そうしますと、排せつ物とかっていうのを、トイレなり、あとごみもそうですけど、扱う人たちというのは、ネパールの社会においては、カーストの中では、要は階級が低い人がされるとされているわけですよ。ということはシェルパも知ってますんで、トイレをおろすということに、おれらはそんなにカーストが低くないって、こういう話になっちゃうんです。だから、それは違う問題だよとか言っても、やっぱり文化が違うんで。ですから、本当に日本の中では当たり前前に行っていることが、海外に行くと意外とそこの文化のハードルが邪魔しまして、トイレをおろすというのは、実は一番エベレストで難しいテーマなんです。

**○司会** ありがとうございます。

それでは平井知事、鳥取県もとっとり共生の森とか、いろいろ森林保全の取り組みを強化されていますけれども、鳥取県政として森林保全、こういった方針で取り組まれていられるのか、そのあたりをお願いします。

**○平井知事** それに関連して、今の野口さんがおっしゃったトイレの問題、これ結構深刻



でして、例えばこの近所でいうと四国の剣山ですか、あそこは大変な状況になっているようです。やはりトイレが上の方がないということがあって、登山道が汚れているということをよく言われます。

実は、ぜひほかの地域でも、へえ、大山ってこんなことやっているんだって野口さんに宣伝してもらえたらいいなと思うんですけども、私どものところでは今おっしゃるバイオトイレをまずやったんですね。頂上のところにトイレをつくってあったんですけども、それをバイオで、要は化学反応を起こさせていくと。それで、中で処理をしていくと。さらに若干の電力を使いますので、それについては風力発電を導入をしてやるというような、そういう仕組みを描きまして始めました。

これで解決したつもりだったんですけども、解決しなかったんですね。それは、バイオトイレにしても、よその地域でも同じことを考えておられると思いますが、底にまだ残るんです、汚泥が。その残った汚泥をどうしたらいいだろうかなというところの解決策がないんですね。

これは県庁の方で実は管理をしているトイレだったんですけども、一つのアイデアとしては、ヘリコプターを飛ばして、そのヘリコプターで、1,709メートルの山頂ですから、そこからつり上げて下におろして下水の処理場に持っていくということも考えたんですが、例えばオオタカとか生態系に影響すると。私たちがさっき申し上げたように一木一石運動で何とか生態系を復元しようとして頑張っているときに、ヘリコプターでその頂上の方を荒らすわけにもならなだろうと。これはできないと。困った。じゃあ、あとは、考えたらどうしようかということで、シェルパがやってくれないことですけども、自分たちでおろそうということになったんですね。県が管理しているんだから県庁の職員でやろうやということを最初考えていたんですけども、とつてもじゃないけど数が追いつかないです。何てったって1,709メートル登って下までおろしてくるのは大変です。

じゃあ登山を、山を愛する人たちにボランティアになっていただいて、一緒にこの汚泥を持っておりませんか。汚泥持っておりボランティアなんですけども、そう言うと格好悪いんで、トイレキャリーダウンボランティアといいまして、このキャリーダウンボランティアというのを募集したら、これ大変集まりました。最初の年も300人ぐらい集まりまして、ことしも9月にあったんですが、250人。実は定員制でありまして、それ以上はもう汚泥もないもんですから、250のペットボトルのような、こういうものをつくりまして、この中に詰めて持っておるんです。ことしでいえば、大体500キログラムぐ

らいの汚泥をみんなで持っておりたんです。

最初の年、私もそっちの方に参りましたが、きょうもたくさんおられますが、子供さんは正直なんですよ。シェルパじゃないけど、「嫌、僕こんなの持っておりの嫌」と、頂上で。「えっ、うち持っておりの。嫌」。だけどね、周りのお父さん、お母さんたちが「そげなこと言わんで、とにかく持っておりんさいな」と、こうやってリュックに詰めると。で、持っておりにくると、すごく気持ちよさそうな顔をしているわけです、子供たちも。わかるんですよ、ああ、こうやって山にいいことをしたなっていうのが。だから、そういう、みんなでやっぱり環境を大切にしていって、森を、山を大切にしていって、そういう運動をいろいろとやってみたらいいと思うんです。今までの常識でなかったことがだんだんと常識になってくるんですね。

例えば鳥取県ですと、砂丘をどうしようかというのは、これ結構問題です。砂丘、行かれましたですかね。

**○野口氏** はい、行きました。

**○平井知事** あそこも一応山がありまして、高さ300メートルぐらいの馬の背という山があるんですけど、この上へ登っていただくと、草が結構生えているんですよ。あれが平成に入った元年、2年、そうした時期というのは物すごい、実は草原のようになったんです。あそこは雨も降りますし雪も降るもんですから、物すごく湿度も高いんですよ。当たり前ですけど、ほっとけば草が生えるんです。昔は草もなかったんですけども、戦後、植林を若干しましてね、木を植えて、要は砂丘を緑地へ変えていこうという時期があったんです。その名残がありまして、それをやりかけた関係で風がとまってしまって砂が動かなくなった。砂が動かなくなったら、もうあとは湿気がありますので草が生えるようになっていったんですね。

我々は気がついて木を伐採することを始めるんですけども、追いつかないんです。草原のまんまだと。どうしようかと。これを最近では、草を抜くボランティアをつくろうと。これもちょっと考えにくいんです。アメリカのニューヨークタイムズという全世界に有名な新聞社がありますけども、このニューヨークタイムズの記者がわざわざ取材に来まして、全世界では砂漠を緑化するためにみんなが汗かいているのに、日本の鳥取というところではみんなで草を抜いていると。それ逆なんですよ。そういうことをやって、緑と戦う人たちということを出ているわけです。

そういうボランティアを、これ本当に夏、暑いんですけども、夏の暑いときの朝にやる

んですね。毎年3,000人以上の人が最近は出るようになりました。さらに、ことしですと5,500人ぐらいですかね。2,000人ぐらいは観光客なんです。観光客の皆さんが、じゃあ私たちも一緒に草を抜いて砂丘をよみがえらせる活動に参加したいといっって入ってこられるんです。そういう時代になったんですよ。だから、みんなの力で自然を大事にして復元をしていこう、これを鳥取みたいないいフィールドでできるんじゃないかなと思うんです。

森づくりも大切にやっています、鳥取県の場合は森林環境保全税という税金を県民税納税者1人あたり500円お願いをしています。それで保安林などの整備ですとか、それからいろんな、今日もそうですけど、これPRを兼ねましたボランティア活動の応援だとか、そういうことに充てさせていただいております。いろんな形で、とにかくCO<sub>2</sub>を吸収して、もう一度地球を取り戻していくために、鳥取からやれることをやっていこうとしております。

**○司会** ありがとうございます。

もう先ほど知事の方からボランティア活動についてのお話がありました。

野口さんはエベレスト、それから富士山の清掃登山を、多くのボランティアの方々と取り組まれていると思います。きょうも会場の皆さん方とボランティアで植樹活動をされましたし、きょう午前中は鳥取市で木のまつりがありまして、そこでまちの清掃活動もされました。このボランティア活動の重要性について、野口さん、どういうふうにお考えでしょうか。

**○野口氏** そうですね、富士山の清掃を始めたときに、不法投棄をね、ふもとは圧倒的に、樹海なんかは不法投棄、5合目から上はポイ捨てなり山小屋が一部出したごみ、ごみが多かったんですね。じゃあ、これはどういう形で始めるかなと思ったときに、例えば僕は東京に住んでいましたけど、東京から行ってそういうごみを拾うのもいいんですけど、それじゃあ根本的な解決にならないなということで、静岡、山梨両県、その地元に向けて環境省の記者クラブを借りて、富士山をきれいにしようということを出した。これが13年前かな、今と大分環境に対するイメージが違う時代ですよ。

当初、僕が声を上げたときに、要は一緒にやろうというときに、地元がわあっと盛り上がるというように、単純に一緒にやろうみたいなところでというのを期待したんですけど、意外と静岡、山梨なんかで、特に山梨が大分違う反応で、例えば富士山が、じゃあ世界遺産になると。仮に富士山が世界遺産になると入山規制が始まるんじゃないかとか、あと入

山料という制度が始まるんじゃないかとか、あとは、もし環境問題というのがいくと、ひょっとしたら公共事業、道路とかはつくれなくなるんじゃないかとか、意外とそっちのマイナスの方ですよ、そういう意見が地元からうわあっと来ましてね、環境なんかじゃ飯が食えないんだ、いろんな意見が来しました。

それで、とにかくいろんな意見が来たときに、今ならよくわかるんですけど、あのころはよく社会がわかってなかったもんですから、へえと思ひましてね。ただ、本当にいろんな意見が来たときに、あ、こういうことかと思ったのが、何となく環境問題という、何か自然を相手に取り組むのがいわゆる環境問題というイメージで持っていましたけど、別に動植物が破壊するわけじゃないんで、ですから、環境問題の相手って人間社会だと思っただけですよ。

じゃあ、どういう社会をみんなで目指していくかじゃないですか。人間社会になると、やっぱりいろんな意見があるんですよ、極端な意見もあるし。中には環境団体がいて、富士山なんか一切入山させなきゃいいとか、中には山小屋なんか火つければいいとか、結構環境団体って極論を言う人もいるし、いろんな意見があって、いや、これは厄介なところに首突っ込んだなと思ひましてね、しんどいなと思った時期も正直ありました。

ただ、この活動を通して思ったことは、社会が相手ということは、富士山なら富士山なり、地元だったら村でも町でも市でもいいし、広げればどういふ日本という国をどうみんなで作るかということじゃないですか。と思ったときに、ああ、社会を相手にするのは夢があるなと思ひましてね。夢があるなと思うと活動って続くんですよ。どんなに正しいと思っても、そこに本当の夢を感じないと、途中で嫌になっちゃうんですよ。

ですから富士山は辛うじて、最初のころはしんどかったんですけど、特に最初のころは、この清掃キャンペーン、キャンペーンをやってもほとんど人が集まなくて、10数年前は1年間で100何人かな、五、六回、トータル100人前後。だから1回5人とか、人が来ないときもあるし。で、僕らNPOでこうやって、ううんとか言いながらごみ拾っていましたけど、1週間後に行ったら、また一からやり直しだし、意外と地元からああだこうだと言われるしね。

特に樹海の不法投棄が本当にひどかったんで、不法投棄っていうのは意外と、あれは犯罪者ですからね、意外とそういった反社会的な方々が主に担当されてやっているでしょう。ですから、あの樹海のごみを見たときに、こいつらを追い詰めたいなと思ひましてね、と思ったら追い詰められるんですよ、嫌がらせが大分あったしね。

ですから、結構彼らの嫌がらせは生々しいしね、やっぱり家をねらいますんでね。しんどいなあ、もうやめようかなと思った時期もあったんですけど、ただ、この口が勝手にね、自分の許可を得ずに、富士山を必ず5年間できれいにするとか、勝手にぺらぺらしゃべりますんでね。これはしんどくて、結局もうやるしかないんで、2年目も人来ないし、3年目もなかなか人が集まんないし。

そしたら4年ですよ。4年踏ん張ったら100人前後しか来なかったのが突然600人を超えて、その翌年が千何百人で、2,000人を超えて、とんとんとと超えて、去年が6,800人ですね。ことしは多分7,000人を超えるんですよ。ですから、今はもう10数年目ですけど、気づいたら日本じゅうからですよ、本当に。2週間前の清掃キャンペーンは、もう毎週のようにみんなやっているんですけど、2週間前は本当、偶然一般募集してね、そしたら北海道から来た方と沖縄から来た方が同じ日にいましてね、何か握手していましたけど。それぐらい全国から来る。

これだけ一般的になっていくと、要は富士山に行くと、本当に5合目から上のごみがないんですよ。それは全部僕らが拾ったという話じゃなくて、あそこは2カ月間で年間30数万人登ってますんでね。

ただ、僕が夏登っていると、上から登山者がいっぱいおりてくるんですよ。目が合うと「野口さんですか」って言うから、「そうですよ」って言うと、何人も来て横でリュックサックをおろすんですよ。あけて、がさがさやっているんで、あめかチョコレートか何かくれんのかなと思うじゃないですか。と思ったら、ごみの入っているごみ袋を取り出して、「はい」って渡しに来るんですね。ですから、だから、「いや、僕はごみの回収じゃないんですよ」って言うんですね。言う、「いや、そうじゃなくてね、ほら、僕らも拾っていますよ」「私も」「あたいも」みたいな。

ですから、富士山に限らず、八ヶ岳もよく行くんですけど、本当に皆さん、ごみ拾う人多くて、顔を見ると拾ってるってアピールしに来る、富士山は特にそう。あれだけみんなね、双眼鏡を持って、こう見ていると、8月はめちゃくちゃ込んでいるんで、あちこちで休憩している方々がちょこちょこ、休憩中にポッケからビニール出して、ちょこちょこ、ちょこちょこ拾ってるんです、これはもう至るところ。すると30万人いますから、仮に1人1個拾ってもマイナス30万個じゃないですか。もちろんみんな拾うわけじゃないしね。ただ、拾う人は何個も何個も拾うし、あと、あれだけいろんなところで拾っている人がいると、拾わなくてもね、捨てにくくなるんです。だから今、完全に富士山はごみを捨て

られない雰囲気は完全にでき上がりましたね。

ですから、特にことしの夏なんていうのは震災の影響もあって省エネ省エネって言われてね、僕なんかはいつもああいうのを見ると、ただ電気を小まめに消しましょうとか、僕みたいなタイプっていうのは、ぱちぱちやったところでね、本当にそんなので地球温暖化が防げるのかというふうに受け取るタイプの人間でしたけど、ただ、この富士山の清掃活動をやって、一点、明確に感じたのが、やっていること自体は地味なんですよ、しゃがんで取って、一個一個、極めて地味ですよ、やっていることは。ただ、あれだけ日本じゅうから人が集まってみんながやって、たかだか10数年であれだけきれいになるわけでしょう。ですから、本当にこの一個一個のこつこつ、こつこつっていうのが、その時々には極めて地味ですけど、その活動がうわあっと広がったときのあの変わり方ね。

ですから、最初はNPOが中心になって始めましたけど、地元の市町村も入って、今、山梨県、静岡県両県も入って、環境省、国も入って、一緒にチームをつくってやっていますけど、で、日本じゅうから人が来るじゃないですか。で、たかだか10数年でこれだけごみがなくなったんで、ああ、なるほどなと思ひましてね、「環境」の「環」は、読み方を変えたら「わ」ですよ。つまりこれは一部の人に取り組む活動じゃなくて、あらゆる人がみんな富士山とかかわっているんで、要はみんなでどう連携してやっていくかが環境問題の環の、つまり輪なんだなと思ひましてね、この輪をこれからどれだけ広げていくかがテーマかなと思ってやっていますけどね。

**○司会** ありがとうございます。

平井知事も御自身、白砂青松復活のボランティアに参加されたり、ボランティア活動を大変熱心に取り組まれています。この県民参画の運動としてボランティア活動をどういうふうに位置づけられていますでしょうか。

**○平井知事** 鳥取は大都市と違ひまして、どうしても人が少ないです。ただ、やることはいっぱいあります。それについて、自慢じゃないですけども、お金はあんまりありません。したがひまして、じゃあみんなで作るしかないかなと。これが地域のコミュニティーの中にまだまだあるんですね。それがいいとこでありまして、総務省さんが統計とったら、全国の47都道府県で一番ボランティアの参加率が高い県になりました。34.5%の人が年間に何かの形でボランティアになっていると。私どもの次の第2位が隣の島根県、それから滋賀県。多分滋賀県は環境に対する意識が高いんじゃないかと思うんですよ。そういうようなことで、これを生かして、もっともっと私たちのまちを元気にしたりきれいに

したりしたいなというふうに思います。

実はこのたび全国豊かな海づくり大会というのが開かれまして、さっき野口さんがおっしゃったように、若桜街道、あそこはまさに天皇皇后両陛下がお通りになったものですから、その前にごみというごみは全部片づけていたんじゃないかなと思います。大丈夫ですか。

そういうことですね、片づけていた。その全国豊かな海づくり大会の一つのテーマは、さっき楽屋でお話ししていたんですけども、災害からの復興ということをテーマにしまして、それこそ森は海の恋人という運動を始められた畠山さんにも招待状を送ったんです。ただ、残念ながら、さっきのようなお話で、大変今忙しくて燃えておられるんで、こちらの方に来られない。その畠山さんの御親戚の、今、県議会の議長さんをされているのが、その同じ畠山さんっておられて、その人も来るはずだったんですが、直前でちょっと時間がなくなったんですが、宮城県だとか福島県だとか岩手県の漁業者の皆さんが来られました。中には気仙沼の方もいらっしゃいました。そういうようなことで、そういう人たちも来ていただいて、みんなで災害から元気に立ち直ろうという、そういう誓いを立て合ったんです。

私たちが、実は年明けにとんでもない雪が降りました。集中豪雨が今問題になっていて、和歌山とか奈良で大変な被害が出ています。台風12号の災害はこの大山あたりでもあったんですけども、そういう集中豪雨が雪にかわったような雪が降りまして、それが大みそかから降り始めたんですね。

これは、実は去年、「ゲゲゲの女房」というドラマがはやりまして、これで境港のまちが大にぎわいになったんですよ、370万人も年間、お客さんが来るということになりましたね。で、これは妖怪に感謝しなきゃいけないという感謝の集いを12月の30日に開いたんです。それで、境港の人たちがゲゲゲの鬼太郎を初めとした妖怪ファミリーにその案内状を出したんです。間違えて雪女まで送ってしまいましたですね。そしたらとんでもないことになりまして、それからずうっと雪がやまないんです。しゃれにならなくなったのが12月の31日から1日にかけてでございまして、268隻もの船が一遍に沈んじやったんです。

実は私たちは雪国ですから、雪が船の上に積もるとバランスを崩してひっくり返ったり沈んだりすることを知っています。だから雪おろしというんですけども、船の上から雪をどける作業をするんです。ところがそれが追っつかなかったんですね。やっているそばか

ら向こうの船が沈んだ、こっちの船が沈んだと。もう本当にお正月がお正月でなくなっちゃいまして、そこから、じゃあ何とかしてみんなで立ち直ろうと、そういうことを言い合っていたんです。

そうした、船が沈んだけど、もう一遍引き揚げて、これ県もお金出したんですけども、引き揚げて頑張り始めた漁業者の皆さんとか東北の皆さんも来られて、天皇皇后両陛下も交えて、災害からの復興ということを始めました。

その雪なんですけども、鳥取砂丘の周りにやっぱり松林があります。それから白砂青松の松原が弓ヶ浜と言われる大変長い砂州の上にございます。何とこれ6,000本も7,000本も一遍に雪で折れてしまいました。で、何とかしなきゃいけない。

それで、白砂青松をもう一回復活させるボランティアを募ろうということで始めまして、今までにもう1,000人以上の方がお手伝いに来ていただいています。東京とか熊本とか、そうした方々も来ていただいています。何とかそういうふうにして、ボランティアの力で自然をよみがえらせていく。それは鳥取らしいやり方かなあとと思ひまして、私たちが立ち上がっているところであります。

**○司会** ありがとうございます。

もうあと5分ほどになりました。皆さんからもちょっと御質問を受けたいと思いますので、ここで最後にお二人から、きょう会場にお越しの皆さんに環境保全とかボランティア活動についてのメッセージを一言お願いしたいと思います。

まず野口さんからお願いします。

**○野口氏** そうですね、最近、何かごみを拾うのが僕の趣味と思っている人が多いらしくて、本当に全国から一緒にごみを拾いませんかというラブコールがすごいんですよ、きょうもその一環かもしれませんけど。だから全国で本当、北海道から沖縄まで、かなりいろんなところでごみを拾ってきましたけど、きょう午前中はごみ拾いでしたね。やっぱりごみ拾いから見えてくるものがあって、例えば樹海の清掃を始めたときに、富士山がなくて樹海がなくて、樹海の中はもう不法投棄が積んでありますから、例えば当時多かったのが医療廃棄物。例えば捨てられた注射器みたいなのがうわあっとあつたりとか、かなり相当ひどかったんですね。

初めてあの現場に行ったときに、ふと僕のおやじがよく昔、僕に言っていた言葉を思い出して、おやじも公務員でしたから、全国、いろんな国も回るんですけど、おやじが言っていた口癖があって、世の中、A面、B面があると。A面はほっといても目に入ってきて、



B面ってやつは行かなきゃ見えてこない。世の中は、えてしてこのB面側にテーマがあると。だからおまえもあちこち行くなら自分からBに行けて、やたら言われていまして、それがあの樹海の中で、ああ、なるほどなと思ひましてね。

遠くから見たらきれいなあの富士山はA面ですよ。ところが樹海は確実にBですよ。特に不法投棄というのはね、こっち系のこういった方、こっちじゃないですよ、こっち系の方が主に多いとすると、どBですよ。ですから、ああ、日本にもまだこういう世界が残っているんだと。ですから、やっぱりBから見えてくる世界が多くて、じゃあ日本じゅうのBを見たいということで、本当に北海道から沖縄までいろんな、特に僕の場合は不法投棄の現場が多いんですけど。

だから、本当にごみを拾って、そこから見えてくるのがすごく多くて、きょうは多分みんなにもお話ししたかもしれませんが、例えば、じゃあ通勤通学、要は毎日歩いているところでも散歩しているところでもいいんですけど、毎日行き来していると、やっぱり知ったつもりになるじゃないですか。例えば僕にとってエベレストは、もう何回も行っているから知ったつもりになっていると。次、今度は登山じゃなくて清掃を目的に切りかえてエベレストに行くじゃないですか。本当にもう知ったつもりで行っても、見えてくる世界が、登るというテーマとごみを拾うというテーマは、見えてくる角度が違うんですね。例えば登るために行くときには上ばかり見てる。今度、清掃で行くと、今度は下ばかり見るんですよ、ごみは宙に浮いてないし。そうすると、エベレストも何度も行って、もう知ったつもりなのに、いろんな角度から見ると、ああ、この角度見てなかったなとか、岩の裏とか、こんなところにこんなごみがあったんだとか、すごく気づくんですよ。

例えばできるだけ毎日移動している場所でいいと思うんですけど、いつも歩いているんで知ったつもりになっているじゃないですか。一度そこを本格的に、一回でいいからごみを拾おうと思って、毎日歩いているところでごみを拾うと、多分垣根の中とかベンチの下とか、ちょっと怪しいんですけど、いろんな角度から見ると、今まで見てなかった世界がいっぱい出てくるんですよ。ですから、本当にこのごみ拾いから見えてくる世界があつて、本当に僕なんか、いつもいろんな現場に行ってますんで、そこから何かいろいろ見えて、そこから活動しているんですよ。

ですから、本当にいろんな活動していると、何でそういうことをやるんですかっていう質問がすごく多くて、何でかなあと思うんですけど、登山家としてたまたまエベレストへ行ったら、たまたまごみを見ちゃったとか、登山家として富士山に行ったらごみを見たと

か、要するに現場に行って、現場で見ちゃうじゃないですか。人間、見るということは、どこかで知るということじゃないですか。知るということは、同時にどこかで人間、背負っちゃうんですよね。ですから、現場に行ってなかったらこういう活動はしてないし、ですから本当、きょうは皆さん、そもそもボランティアとして参加してますんで意外とそういう方は多いと思うんですけども、やっぱり自分の、自分で現場に行って、目で見て、そこで何かを感じて、そこからアクションが広がっていけばいいなと思うし、特に子供なんかそうですね。

僕の環境学校で、結構子供が来るんですよ、小学校とか。みんな環境問題って来るわけですよ。あるときに小学生に「環境問題って何だろう」って聞いたら、男の子が「環境問題は京都議定書の6%を守ることです」とか言っていましたね。それはそれで、そうかもしれないんですけど、すごく大きな違和感がありましたね。ですから、何となく自分と自然との接点があって、やっぱり山がいいな、海がいいなとか、川がいいなとかがあるから守りたいなみたいなのここに持っていかないと、だから自然との接点ですよ。

あと最後に、もう1点あるとすると、いろんな山に登っていて、例えば富士山も霊峰であると。あれだけごみが多い。白山ってあるじゃないですか。白山に地元の神社の方に呼ばれて登ったときに、あそこも百名山だし、込んでいるんですよ。僕はもう職業、職業じゃないけど職業柄ね、山を歩いているとごみを探す癖があって、ごみがない。これだけ人がいて、何でごみがないんだろうと思ったときに、あれっと思ったのが、すれ違う人が「野口さんですか」って言うから「そうですよ」って言うと、「ようこそ白山へ」って、この「ようこそ」という言葉を使う人が実に多いんですよ。この「ようこそ」と言う方は、あんまりすれ違うときに山で聞いたことなく、で、「ようこそ」「ようこそ」。何かいい言葉だなあと思いつながら山小屋に着いて、山小屋のおやじに何でこの山、こんなにきれいなものって聞いたら、いや、野口さん、多くの人が県内だと、登山者が。自分たちの白山という思いがあると。だから、ああ、なるほどなと思って、僕が来たときに「ようこそ私たちの白山へ」ということで「ようこそ」なんですよ。

だから、「ようこそ」という言葉を使うだけあって、本当にきれいですよ。ほんで、山小屋の人に聞いたら、県外から来る人は、たまにごみ捨てるんですけど。ごみを県外から来た人が捨てたときに、地元の登山者がすぐ拾うんですけど。だから、もうあそこもごみを捨てさせない雰囲気できてきて、ですから、本当に地元で愛されている山はきれいですよ。別に富士山が地元で愛されてないとは言いませんけど、ただ、その差がすごい出ま

すね。ですから、本当に環境問題に、何しろやっぱり地元が中心になっているいろんなことを取り組んでいくというのが一番大きいんだなあということを思っています。

**○司会** ありがとうございます。

じゃあ最後に平井知事、会場の皆さんへ、また県民の皆さんへのメッセージを一言お願いします。

**○平井知事** 本当に野口さんのお話を聞いていて、やっぱりごみを拾うなどして環境を大切にすることというのは、私たちになくってはならないことだと思います。

実は「ようこそ」というのは、こちらの山陰でも言いまして、この因幡には、因幡の源左という方のお話が語り継がれているんですが、「ようこそようこそ」というふうに行き会う人に呼びかける。それは相手のことを受け入れますよという意味で「ようこそようこそ」なんですね。多分野口さんにはぴったりのとこだと思いますんで、ぜひ鳥取に移住をしていただいたらいいんじゃないかなと。（拍手）

今、一生懸命頭の中で野口さんと、どうもオオクニヌシノミコトが重なって見えるんですよ。ここ、因幡の白兎、オオクニヌシノミコトは大きな袋を肩にかけ、あれ全部ごみ袋ですから、ぜひそんなことでこちらの方に住んでもらってもいいかなあと思いながらお話を伺っていました。

実は海づくり大会、環境にも取り組もうということで、白うさぎ大使という大使をつかったんです。これは新しい国づくりをしようと。1万人の子供たちが中心になって参加したんですね。植林をしたりごみ拾いをしたり放流をしたりして、自然をもう一度自分たちのためによくしていこうと。結局環境をよくするというのは人のためじゃないんですよ。生きとし生けるものの一員として自分たちがあり、自然とともに生きる存在として人間がいるわけですから、自分たちのためにやっていること。それを特に子供たちは環境に対する直観力が鋭いですから、ぜひやろうということで1万人以上が参加して、白うさぎ大使というのをやりました。

次は2年後に向けて、全国植樹祭をやることになります。これが運動として引き継がれていって、鳥取の中でもっともっとそうした環境推進の輪を広げていきたいなというふうに考えているんです。

「山林に自由存す われ此句を吟じて血のわくを覚ゆ 嗚呼山林に自由存す いかなればわれ山林をみすてし」。これは武蔵野の雑木林をきれいな文章でつづった、国木田独歩がつくられた詩なんです。どうして私は山林を捨てるだろうか。しかし、実は文明の勢い

の中で、山林は見捨てられていい存在、対決すべき存在ということになりかけていたと思うんですね。今ようやく、もう一度山林というのは自分たちの体の一部なんだというふうに直観的にも理解できる人たちが日本にふえてきたと思います。鳥取からその新しい感性を磨き上げて育てていきたいと思います。そのための全国植樹祭、ぜひ成功させていきたいと思います。天皇皇后両陛下も鳥取空港から立たれる前に、私たちの新しい、どこか行っちゃったですね、さっきまでそこにいたんですけども。イメージキャラクター、あれ大山なんですけどね、大山の緑の山をイメージした鳥なんですけど……。

**○野口氏** あの絵のあれ。

**○平井知事** あの絵ですね。そうです、そうです。これは今までととリンというのが跳梁ばっこしております、これはカニとヒラメだったんですけども、今度は大山になってまして、新しいキャラクター、2体、鳥取空港にお見送りに行きました。

実は両陛下にもそういうキャラクターについて御説明をしていたんですね。それでその後、ちょっと待合室の方で最後のお別れの言葉を申し上げたときに、天皇陛下がお尋ねになるんです。「あっちのカニの方はととリンちゃんでしたよね。あの緑の鳥は、あれは何という名前でしたっけ」って言うんですね。「陛下、実は今まだ名前を選定中でございまして決まっております」と言ったら、そうしたら天皇陛下が皇后陛下の方を向いて、「うん、やっぱり決まっていなかったんだよ」と言って、何か二人で話を始められるんです。どうも名前が思い出せなくて、お二人で話し合っておられたそうなんですけど、実は名前が決まっていなかったと。近々決まりますんで、ぜひ皆さん、またかわいがってあげていただきたいと思うんですが、全国植樹祭、野口さんと一緒にこれから頑張っていきたいと思っています。

植樹祭が成功すれば、野口さんが本当に住民票を移す日が来ると思いますんで、よろしくお願い申し上げたいと思います。（拍手）

**○司会** ありがとうございます。

---